

## 高大連携「人文科学概論」は予想以上に面白かった！(筆者感) 文系での授業はこういうもの、高校生にも分かる新鮮な講義であった

筆者は理系の中でも理系的な「物理」の専門であるが、今年から初めて始まった、神戸大学高大連携講義「人文科学通論」の最終日(13日)の講義を受けてみた。なお、筆者は理系の連携講義「自然科学概論」は12日最終日の講義も受けたので、両講義を比較して、「独断的」紹介をしてみよう。

### 理系の講義は「最先端技術、理論」で実感は遠く、難しいものが多い 文系の講義は「人間、コミュニケーション」など、身近なテーマが多い

「楽しめる授業とはこのようなもの」といえるほど、文系と理系の違いを感じた。理系は理論的で難しい講義が多かった。当然、理系の講義では、授業内容への取っ掛かりのための知識量が大きく、講義をその場で理解することが難しくなる。それらの部分は、数式、方程式、理論などに裏付けられた部分がそれに当たる。一方、文系の講義の場合、講義の内容そのものが生活の中に基づくもので、内容が具体的であることが多く、理解する上で障害となるものが少ない(哲学などを除くが)。

両方の連携講義を受講した生徒はいないので、生徒による両講義の評価は得ることができない。そこで筆者による独断の意見となるが、文系の連携講義は受験勉強に基づく高校での授業を超えたものになる「本物の知識」と位置づけられる。この神戸大学高大連携講義「人文科学概論」を受講した生徒が得たものは非常に大きいはずである(筆者も十分楽しめた)。



### 文系の講義は「人間、コミュニケーション」など、身近なテーマが多く楽しい！

発達科学部、松岡広路先生による「おとなの学び、生涯学習」はユニークな実習で始まった。講義の最初に受講生相互に5人と挨拶する。早く5人と挨拶が済めば座る。これだけのことだが、受講生の性格などが直ぐに現れてくる。また、相互にインタビューを短時間で行う「ゲーム」実習もあった。初めて会った人に短い時間にどれだけ会話が成立し、情報を入力できるかを求める実習だ。これらを通じて、受講生間の互いの緊張を緩和する技術や、コミュニケーションでどこに問題点があるのかを実体験で感じたり、表向きの態度からの脱却を図ったりすることができることを学んだ。これらの技術が「社会教育、生涯教育」の上で大きな力となることを感じ取れる講義で、高校では考えられない体験がなかったのではないかと、筆者も新鮮な授業形態として十分に楽しめた。

### 家庭の「教育能力」低下が著しく、社会が支える仕組みが必要となったのだ！

午後の1コマ目の授業は、発達科学部伊藤篤先生による「地域における子供の発達支援」で、幼児教育の講義であった。近年では、大家族制の崩壊、少子化により、生活の中で、幼児教育の分野で難しさが増大している。昔なら、



休み時間も楽しいひととき(他校生と一緒に)

子供のうちからの体験することができた(小さい子供の子守りなど)ものが、現在では難しい。母親が子育てを難しく思うのもそれらの経験不足が大きく影響している。大家族制では、祖父母などからの伝承も期待でき、回りが支える構造が備わっているが、家庭の個別化によりそれらも崩壊してしまっている。これらの顕著な例として、児童虐待の事例があり、子育てが出来ない親の存在が増えているのではとの危惧がある。これらの支援としては、親権停止、養護施設による児童引き取りなどによる「児童保護」が行われている。また、社会全体として「子育て支援」の仕組みも行われてきている。「子供の発達支援」はいろいろな機関を使って対応されてきた。具体例として、児童館活動による「子育て支援」の紹介があった。

## 現在では、家庭の「児童教育能力」低下が著しく、社会が支える仕組みが必要だ！

昔の養護施設では、経済的に子供を養育できなくなり入所した児童であった。このような場合、子供が経済的に独立できるよう支援することで解決していた。しかし、現在の場合は、養護施設に収容されている児童には小さい頃からの虐待経験を持つケースが多い。この虐待経験から児童の心の問題として大きな問題を抱えている。こころの壁を取り除き人間関係を再構築できるような制度として、「ビッグブラザー制度」というボランティアを通じた活動が海外にある。年長の人（兄貴的な存在）「Mentor」による児童の教育支援が行われている。積極的に何かを行い支援するのではなく、身近な兄弟としての存在で、児童からの能動的な要求に答える支援活動である。



## 最終講義「子供の臨床教育学」は学問として新しい視点から始まる教育学なのだ！

高大連携講義「人文科学通論」の最終講義は発達科学部の廣木克行先生による「子供の臨床教育学」となりました。この講義では、最初に「臨床教育学とは何か」という文章の朗読から始まった。教育学という学問の限界から脱して、教育現場に基づく教育学としての「臨床」教育学が作られた。教育のあり方は、学問ではなく、教育現場での問題解決であるべきであるという、極当たり前のことが忘れられているのではないか？

### 「いじめ」、「学級崩壊」、「不登校」に教育学はどこまで解決策を示せるか？

先生の最初の朗読に続き、教え子の教師体験（学級崩壊）の話を通して教育のあり方を訴えるものでした。「臨床教育学」の必要性を認識したのはこのことからだったこと、現在の「いじめ」、「学級崩壊」、「不登校」の諸問題についてのカウンセリングを通して得たことなどを元に講義が進められた。

### どこに悩みあり、どのような症状を起こすか？ 「本人の心の中の苦しみの裏返し」

ある大学生の事例で、「幼児帰り」のカウンセリングの話になった。受験勉強だけに力を注ぎ、自分で人生を築き上げる力を欠いてしまった大学生本人と親の苦しみをどのように解決するか。本人自らが解決しようとする気持ちを持つようにすることが第一歩であること、それを家族、まわりの人々が本人に協力、支援することで解決に至ることを認識すべきである。1人であること（独立性）とグループである（協調性）の2つの精神は共にバランスよく育たないと人間として成立しにくくなる。グループに属していることが絶対と考えすぎる傾向にある子供が多くなってきているようだ。一緒にいることで安心できる現在の精神構造はどこで作られてしまうのか？

### 不登校の原因（初期原因、付加原因）究明だけでは、不登校の解決策が得られない

不登校になったきっかけは小さくても、不登校になることから自己矛盾に対しての解決策が見つからない本人の悩みと裏返しの行動（家庭内暴力、自己虐待）が始まる。この悪循環をどこで断ち切るか、それが臨床教育学の主たる目的となる。不登校になった原因を調べることで解決は出来ない。不登校の悪循環から脱するための「治療」こそが教育のやるべきことなのだ。

不登校が問題となりだした当初は、「本人病気説（'40～'60年頃）」から始まり、次々と不登校の原因を挙げて思考停止（学問的に説明が済んだことにする）したため解決策を見つけるに至ることは無かった。その後も、「家庭原因説（'70年頃）」、「真因（家庭）、誘引（学校）説（'70～'80年頃）」、「学校原因説（'80～'90年頃）」、「社会病理説（'90～現在）」などと次々と原因を指摘してきたが、不登校の解決策は見つかっていない。

### 「本人の話を徹底的に聞くこと」これがカウンセリングの全てであること

不登校のカウンセリングでは、本人の話を徹底的に聞くことから始まる。本人との共感を持てるように話を聞くことで、決して命令、指示、助言などを示さないこと。本人の立場に立って気持ちを理解するように話をすることで、信頼感を得ることができる。不登校の生徒との信頼構築から解決策が見つかる。臨床教育学の目指すところは、このような現場での悩み、苦しみを理解して解決策を見つけるところにある。原因究明などの手法ではなく、症状を解決する本来の目的を大切にする教育を大切にするところにある。全ての解決は本人の自己解決能力にあるのだから、自己解決能力を育てるための方策がこれからの教育学の目指すところである。

### 夏休み集中講義形式の「人文科学通論」全講義終了、修了証書授与式が行われた

全講義が終了した後、終了証書授与式が行われ、一人一人に修了証書が手渡された。続いて、川嶋先生の閉講の挨拶で連携講義が無事終了した。最後に連携講義のアンケートを記入して、全日程が無事に終了した。（志）